

## 論文

英語 hard の多義性に関する認知言語学的研究（その 1）  
－「激しい」の意が生じる派生プロセスを中心に－

A Cognitive Approach to the Polysemous Mechanism  
of HARD (Part 1)

阿 武 尚 人

ANNO Naoto

## 抄録

本稿は、英語において典型的な多義語の一つとしてみなされるhard語彙概念を共時・通時的に分析し、一見、無限にも感じられるその意味派生のプロセス群が有限の意味論的法則に基づいて解釈し得る認知メカニズムを論考するものである。まず、hardの多義性に関わる先行研究の問題点を考察し、その発展的改良案を模索する。次に、その多義性を産む認知メカニズムが我々の日常経験（特に視覚認識、焦点移動）に基づいて生成される意味論的論理を分析する。

キーワード：多義性、焦点移動、図地分化、認知言語学

## 1. はじめに

阿武 (2018) では、**dry** の多義性を生じさせる認知メカニズムを論題に、複数の日本語訳を単一の概念的視座から捉えることができる語彙学習法的一端を示した。そこでは、特に情報学・現象学の視座に立って単一の観点から語彙の多義性を見つめる有用性を論じた。言葉の意味というものは人間の知の発達・進化に伴って拡張してきたと捉えられることから、その解明には経験主義に則り、かつ、通時的視座に沿った意味変化のプロセスを考慮することが必要条件となる。その例として、英単語 **crane** は原義として「鶴」を指示しつつ、文明の発達に伴い、「(クレーン車の) クレーン」をも表すようになったことなどが挙げられる。鶴が餌をついばむ動作、および首が長い姿・形がクレーンに投影されるという人間の視覚経験がその意味変化における拡張基盤となっている。本稿においても同様の経験主義に立脚し、英語において典型的な多義語の一つとしてみなされる **hard** の語彙概念を共時・通時的に分析する<sup>1</sup>。

## 2. 先行研究の考察

### 2. 1. 瀬戸 他 (編) (2007) による **hard** の意義展開

英語教育における語彙習得 (指導) の重要性が唱えられる昨今において、近年は多義語の煩雑な意味用法をいかに習得するかに焦点を当てた書き物が数多く見受けられる<sup>2</sup>。その一つに、瀬戸 他 (編) (2007) の『多義ネットワーク辞典』がある。学術的見地に基づいて各多義語の中心義を見定め、メタファー、メトニミー、シネクドキをもとに意味の派生展開に対して体系的説明を試みているこの辞典は、多義研究の成果を語彙学習に還元しようとする良書といえよう。一例として同辞典における **hard** の意義展開を以下に転記する。

<sup>1</sup> 初山 (2001) は多義語分析の課題を次の4つに分けている。(1) (それぞれ確立した) 複数の意味の認定、(2) プロトタイプの意味の認定、(3) 複数の意味の相互関係の明示、(4) 複数の意味すべてを統括するモデル・枠組みの解明、である。この区分に従うと、本稿は (3) を主に扱う。

<sup>2</sup> 外国語学習における語彙習得の重要性は、“Without Grammar very little can be conveyed, without vocabulary nothing can be conveyed” (cf. Wilkins (1972: 111)) など多くの研究者が強調している。

- (1) 0 <物が>固くて形が変わらない
- 1 〔特性類似〕色・音・味が硬く感じられる
  - 2 〔特性類似〕人の表情が硬くて変わらない
  - 3 〔特性類似〕事実が硬くて揺るがない
  - 4 〔特性類似〕問題・活動が扱いがたい
  - 5 〔特性類似〕人の行為が硬く変わらない
    - ① 〔特性類似〕行為・影響の程度が激しい

— 瀬戸 他（編）（2007）（s.v. *hard adj. adv.* 5）

主に、共時的立場から中心義を定め、意義展開パターンによって各意義を明示的かつ体系的に記述する試みは高く評価できる。本稿では、その意義展開パターンのうち、意義展開パターン 5 「人の〔特性類似〕行為が硬く変わらない」並びにその副意義である「〔特性類似〕行為・影響の程度が激しい」に注目し、それぞれの意義派生展開の妥当性を分析する。

まず、5 の「〔特性類似〕行為が硬く変わらない」は *hard* のいかなる意に当てはまるのかを下記（2）で例文とともに確認する。

- (2) 5 メタ〔特性類似 0〕<人（の行為など）が>硬く変わらない：一途な、打ち込んだ, ((at)) ; *adv.* (人の行為などが) 硬く変わらなく、一途に、激しく、一生懸命に、熱心に

—She was such a hard worker./ Most of his business colleagues are hard drinkers./ I've not watched any television all day because I've been hard at work. // *adv.* Work [laugh, cry] hard/ The men swore hard./ Both boxers are breathing hard./ The students drank hard all through the night./ She tried hard not to fall in love with him.

— 瀬戸 他（編）（2007）（s.v. *hard, adj. adv.* 5）<sup>3</sup>

<sup>3</sup> 「一途に」、「激しく」、「一生懸命に」、「熱心に」という意味用法が並列されているが、この表記方法だと各意が同次元の単一カテゴリーに含まれるように見えてしまう。（1）、（3）を見る限り、展開パターン 5 からさらに派生した意味用法が「激しい」と記載されているので、列挙順序を含め表記方法に再考の余地

上記（２）により、「〔特性類似〕行為が硬く変わらない」の意義展開パターンと結びつく意は形容詞的用法では「一途な、打ち込んだ」、副詞的用法では「一途に、激しく、一生懸命に、熱心に」であることがわかる。しかし、これらの意を果たして「行為が硬く変わらない」という意義展開で包含し得るのかという疑問が生じる。次に（３）でその意義展開ネットワークの説明を観察する。

- （３） ネットワーク…また、「＜人（の行為など）が＞硬く変わらない」の意義は、努力・取り組みなどが「一途で変わらない」特性に力点を置く。ここから「＜行為・影響など（の程度）が＞激しい」の意義が派生する。

－ 瀬戸 他（編）（2007）（s.v. *hard adj. adv.* 5）（一部筆者省略）

派生義への展開プロセスを踏まえて「固い」という中心義を包含する必要があるとはいえども、そもそも「人の行為などが硬く変わらない」という表現は日本語として少々違和感がある<sup>4</sup>。「行為が変らない（努力・取り組みなどが一途で変わらない）」、つまり「行為の継続性」は「＜行為・影響など（の程度）が＞激しい」の意義と概念上容易には結びつかないように思える。例えば、「継続的な運動」が「激しい運動」に概念上繋がるのか、逆に「激しい試合」を「継続的な試合」と捉えることが可能なのかは非常に疑問である<sup>5</sup>。

そして、上記（２）の例文中、「激しさ」の意を表すと思われる例（以下（４）として再活）においても同様に「行為の継続性」概念から *hard* の副詞的用法「激しく」との結びつきを概念上見出すことは困難である。

---

があるかもしれない。

<sup>4</sup> 「人の行為などが硬く変らない」における「かたく」の漢字表記「硬」の使用も適切かどうか疑問が残る。事実、高橋（2017）では「カタイ」の意味分類として「硬度」「密着」「不変」「表現」「堅実」「精神」を設定し「堅」「固」「硬」各表記の頻度の推移を調べているが、それによると「硬」の表記は「硬度」以外で使われることは稀であり意味の範囲がかなり限定されている。本稿では「カタイ」の漢字表記による混乱を避けるため、また日本語「カタイ」ではなく英語の *hard* を主な分析対象としているため、日本語表記は平仮名の「かたい」を用いる。

<sup>5</sup> 中心義「かたい」から「行為が変らない」の意義に派生し、そこからさらに「激しい」の意義に派生するという論展開であれば、中心的概念として「かたい」の意義を含有すると考えられる *solid* や *firm* 等の各語集がなぜ「激しい」という意義を有さないのかという疑問も生じる。

(4) Both boxers are breathing *hard*.(両ボクサーは激しく呼吸している)— 瀬戸 他（編）（2007）（s.v. *hard*, *adj. adv.* 5）

（斜体、下線、日本語訳筆者）

繰り返すが、上記（4）における *hard* の意と考えられる「激しく」に「〔特性類似〕行為が硬く変わらない」の概念を適応することはやはり難しい。「行為の継続性」と「行為の激しさ」の概念間には明らかなミッシング・リンクが存在しており、筆者が確認する限りは両概念を結びつける手がかりとなる記載は瀬戸 他（編）（2007）には見当たらない<sup>6</sup>。

また、上述の「行為の激しさ」は意義展開パターン5「人の〔特性類似〕行為が硬く変わらない」の枠組みにおけるものであるが、その主意義から（特性類似で）派生する副意義「〔特性類似〕行為・影響の程度が激しい」の枠組みにおける「行為の激しさ」との差異も明確ではない。次の（5）がその副意義の詳細な定義と例文である。

- (5) 5-a メタ〔特性類似◀0〕＜行為・影響など（の程度）が＞激しい：＜行為が＞激しい力の、＜酒・薬物が＞効き目の激しい、＜ボルノが＞がげきな；*adv.*（行為・影響などの程度が激しく、ひどく —*hard liquor/ a hard blow to the head/ He gave the door a good hard slam./ These books, after years of hard use, may have worn or damaged pages and bindings./ Hard drug use—heroin and cocaine—have declined substantially./ People must be over 18 in*

<sup>6</sup> 瀬戸 他（編）（2007）は辞典であるがゆえに紙面上の制限が厳しく、各派生展開を詳細に説明することは困難である。そこが、各派生展開間にミッシング・リンクが生まれやすい一因となっていることは当然否めない。

order to purchase both soft and hard porn.//  
*adv.* People tend to hit keyboards too hard./  
 It's raining hard this morning, isn't it!// He  
 was hard pressed to name a favorite book.

－ 瀬戸 他（編）（2007）（s.v. hard, *adj. adv.* 5-a）

## 2. 2. 中桐・森山（2003）による hard の概念拡張メカニズム

中桐・森山（2003）は hard の「かたさ」が「激しさ」に意味変化する過程を「容器 / 内容物」のスキーマに基づいて次のように分析している。なお、紙面の都合上、本論旨に関係する記述についてのみ、下記の（1）－（2）として抜粋する。

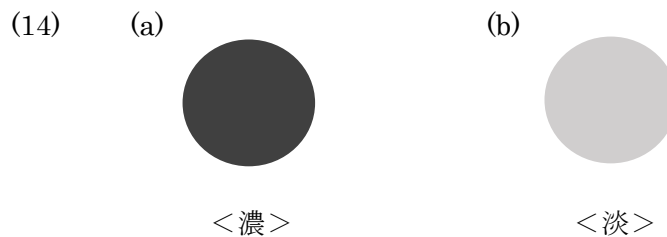
- （1） （12） a. 鉄は**かたい**。  
           b. 昨夜のホテルのベットは**かたかった**。  
           c. 一日おいたらパンが**かた**くなった。

（12）は、ある単体を形成する構成要員の結束性が強い状態を表しているが、この例も（11）と同様に、「容器 / 内容物」の関係で捉えると、容器となる「鉄」、「ベット」、「パン」の構成要素の結束性が強い状態を表していると考えることができる。また、容器の内容物と捉えられる構成要素の量が同じ場合は「結束性の度合い」が「かたさの度合い」と考えられるが、この「かたさの度合い」は構成要素の量の多さによっても変化すると考えられる。つまり、構成要素の量が多くなればなるほど「かたさの度合い」も強くなる。例えば、

- （13） a. かたい鉛筆／樹木  
           b. やわらかい鉛筆／樹木

のように、（13b）の「やわらかい」は「もろい」と言い換えることができ、構成要素の結束性が弱いので「くだけやすい」だけでなく、「や

「わらかい樹木」の場合は樹木の内部に隙間が多かったり、空洞であったりして「もろい」場合もある。これは容器内の内容物の量の多さに関係しており、この「量の多さ」は「密度の濃さ」と捉えなおすことができ、以下のような<濃・淡>のスキーマで示すことができる。



このように、「かたさ」は容器とみなされるモノを構成している要素、すなわち内容物の「結束性の強さ」と「密度の濃さ」の両面から捉える必要がある。「かたさ」が「結束性の強さ」と「密度の濃さ」から捉えられることは、日本語だけではなく、英語の‘hard’も同じように捉えることができる。

— 中桐・森山 (2003: 48, 49)

- (2) …‘hard’は OE 期に既に「かたい」から「厳しい」や「激しい」に意味変化を起こしていたことが伺える。「厳しさ」や「激しさ」は ModE の

- (19) a. a hard work/fight  
b. a hard worker/fighter

にみられる。(19a), (19b)の‘hard’はそれぞれ、

- (20) a. requiring a lot of physical strength or mental effort.  
b. putting a lot of effort, energy, etc into an activity

— *OALD* (s.v. hard) (下線筆者)

と定義され、(20b)から分かるように‘work’や‘fight」といった事象は陽

気とみなされ、その内容物の量の多さが‘hard’の意味につながっている。これは容器／内容物のスキーマに加えて、(14)の＜濃・淡＞のスキーマが基になり、「激しさ」を表す、‘hard’の意味に反映されているといえる。日本語でも「激しさ」は、

(21) a. 昨日のボクシングの試合は激しかった。

b. 昨日のボクシングの試合は内容が濃かった。

(21b)のように、「密度の濃さ」を示す表現でいいかえることができることからわかるように、この表現も＜濃・淡＞のスキーマから捉えられている。

－ 中桐・森山 (2003: 50, 51)

中桐・森山 (2003) の論考は、「かたい」を中核概念とした「激しい」への意味派生過程を「容器／内容物のスキーマ」と「＜濃・淡＞のスキーマ」の観点から分析している。具象領域において *hard* の原義「かたい」を「密度の濃さ」という概念で捉え、そこから「活動内容の濃さ」、つまり「活動内容の激しさ」という抽象領域への写像が行われているという論旨である。仮にこの写像関係が正しいとすると、「密度の濃さ」をその原義概念にもつ他の英語語彙においても同様の写像関係を見出すことで再現性の要件を満たすことになる。

(3) <物が>密度が高い (◆□詰まっていて水・光・視線などを通さない) ▶□濃密な、目の詰んだ、<霧・煙などが>濃い、<フィルム・ガラスなどが>高密度の、ほとんど光を通さない。

▶□ a *dense* fog

(濃霧)

－ 瀬戸・投野 (編) (2012) (s.v. *dense*, *adj.* 2) (下線筆者)

(4) Having its constituent particles closely compacted together; thick, compact. a. Of close molecular structure.



— *OED* (s.v. *dense*, *adj.* 1a)

(3) では形容詞 *dense* が「密度の濃さ」をその概念として包含することが確認され、(4) の *OED* による初出例の定義では原義において既にその概念を有していることがわかる。加えて、*dense* の意味用法における具象義は、基本的に「密度の濃さ」という意味を有する (cf. 瀬戸・投野 (編) (2012)) ことから、この語彙の中核概念も「密度の濃さ」であると考えられる。しかしながら、形容詞 *dense* は「激しさ」に関わる派生義を有さず、その副詞形である *densely* においても同様に「激しさ」に関わる定義は見受けられない。

(5) 副 密集して、見通せないほど；濃密に、濃く

a *densely* populated area

人口密度の高い地区

— 井上・赤野 (編) (2006) (s.v. *hard*, *adj.*) (下線筆者)

上記の『ウィズダム英和辞典』(第2版) による *densely* の定義は、上述の「密度が高い」という意を示す記載だけである。事実、以下 (6) も副詞 *densely* と動詞 *rain* が共起せず、非文となる。

(6) It rained *hard* last night.

\*It rained *densely* last night.

中桐・森山 (2003) の論考による「物質の『密度が高い』という具象義から行為が『激しい』という抽象義へ意味派生する」という主張が妥当であるならば、その具象義を原義、中核概念として有する *dense* もその抽象義において同様の派生義が存在しなければ再現性の論理に合わない。

また、2. 2 — (2) における実例の (21) の例においては、写像関係において、「密度の濃さ」を根源領域に、「活動内容の濃さ」が目標領域「活動内容の

激しさ」に写像されると論考していた<sup>7</sup>。しかしながら、例えば(21)例文中のボクシング以外の活動においても同様の写像が再現可能であるかは次の(7)のように疑問点が残る<sup>8</sup>。

(7) a. ? 昨日の授業(劇)は激しかった。

b. 昨日の授業(劇)は内容が濃かった。

つまり活動の種類によって、「活動内容の濃さ」が目標領域である「活動内容の激しさ」に写像されない例もあり、この写像関係の再現性も不十分と言える。

それに加えて、以下のような *hard* の「激しさ」の概念を有する形容詞的用法において「密度の濃さ」という原義に関わる概念を見出すことは難しいように感じられる<sup>9</sup>。

(8) <行為・影響などが>激しい▶□<運動・動作などが>激しい力の、勢いの凄まじい、猛烈な；...

▶□ a *hard* blow

強打

▶□ He gave the door a good *hard* slam.

彼はドアをバンと閉めた

— 瀬戸・投野(編)(2012)(s.v. *hard*, *adj.* 6a)(一部省略筆者)

<sup>7</sup> ボクシングで稀代の *hard-puncher* として知られる Mike Tyson の YouTube 動画で “Mike Tyson – The Hardest Puncher in Boxing Ever!” (アクセス：2020 年 1 月 30 日) の日本語訳タイトルが「マイクタイソン-ボクシング史上最も難しいパンチャー！」と訳されていた。これはおそらく機械翻訳によるものであろうが、単一語内に含有される意味用法が多ければ多いほど機械翻訳によるこのような誤訳が生じる可能性が上がり得る。特に動画タイトルは前後の文脈も明記されていないが故に、この傾向が顕著であると考えられる。

<sup>8</sup> そもそも、(21b) の「昨日のボクシングの試合は激しかった」における「激しかった」という表現に対して英語では *hard* ではなく、*intense* を用いるのが一般的である (cf. COCA (アクセス：2020 年 2 月 8 日))。

<sup>9</sup> 中桐・森山(2003)では *hard rain* を例に、*hard* は「強さ」と関係するために事象の継続時間に関係なく密度が濃いものであれば *hard* であらわされる条件を満たしていることになると述べられているが、(8)のような「強さ」の概念を含む *hard* の例において「密度の濃さ」が関係しているようには思えない。

### 3. 図地分化による焦点移動

#### 3. 1. hard の概念生成に関わる前提認識

2 章で考察した通り、hard の多義に関わるこれらの先行研究では、具象義「かたい」から抽象義「激しく」への派生展開におけるミッシング・リンク、再現性の問題が存在することを観察した。これらの問題を解消し、「かたい」-「激しく」の派生展開において妥当な意味論分析を行うために、まず hard が内包する概念を *OED*、寺澤（編）（1999）で通時的に確認する。

(1) \**Kartús* = Gr. *kpatús* strong, powerful.

— *OED* (s.v. hard) (下線筆者)

(2) ◆□ OE *h(e)ard* < Gmc \**xarðuz* (Du. *hard* / G *hart* / ON *harðr* / Goth. *hardus*) ← IE \**kar-hard* (GK *kratús* strong (cf. -CRACY))

— 寺澤（編）（1999）(s.v. hard) (下線筆者)

(1)、(2) によると、ギリシャ語における strong や powerful の概念が語の発生史として観察される。そして OE 期においては以下の概念が現れている。

(3) ((OE)) 堅い；きびしい；激しい。

— 寺澤（編）（1999）(s.v. hard, *adj.* 1) (下線筆者)

つまり、strong, powerful の概念を踏まえて、英語 hard は OE 期時点で「激しい」の意味用法をすでに発達させていることが確認される。この初期に発生した派生展開を分析するために、英語 hard の「かたい」という意が包含する概念を詳細に観察する必要がある。

まず *OED* による英語 hard の初出例における定義を以下（4）で確認する。

(4) Passively hard: resisting force, pressure, or effort of some kind.

— *OED* (s.v. hard, *adj.* I) (下線筆者)

上記(4)の定義を観察すると、passively hard の記載から hard に「受動性」の概念が存在したことが窺える。その概念は resisting force の resist にも同様に見出すことが可能である。

(5) [transitive] resist something to not be harmed or damaged by something

— OALD (s.v. resist, v. 4)

上記(5)の定義を踏まえて resisting force の概念を考察すると、「損害を受けないために抵抗する力」と解釈することが可能になる。ここで注目したいのは「損害を受けない」という概念が、損害を与えようとする「外的攻撃主体」とも言える存在を前提としている点である。(5)の受動態における by something の存在が証明しているように、「受動」とは「他からの動作・作用を受けること。他から働きかけられること。受け身。」(cf. 松村(監修)(2012: 1745))であり基本的には「(対象に対して) 外的圧力を生み出す主体」の存在を前提とした概念である。つまり、passively hard は、「外圧」に対する耐性的特徴を示している。逆にいえば hard が有するその耐性的特徴は「圧力を生み出す主体(外的攻撃主体)による外圧に屈しない抵抗力」を概念として包含すると解釈することができる。この解釈は日本語の「かたい」にも同様に当てはまると考えられる。

(6) さて、ある個体について、「かたい」と言う場合、「手でさわる／押す」等、外部から＜力を加える＞ことが前提となる。…さらに、力を加えた結果、相対的に強い＜抵抗を感じさせる＞時に、その個体を「かたい」と言うと考えられる。このことを次の事例で確認する。

4 「腹に触って下さい。腹を」

患者のほうが嬉しそうに医者に注文を出してくる。善之進は手を入れた。右腹部の固いしこりはまだ触感できたが、その形が幾分、縮小している感じがしないでもない。(遠藤周作『灯のうるむ頃』、p.195、講談社)

例4では、触れてみて、体の他の箇所よりも抵抗感が強い部分、すな

わち「しこり」を「固い」と描写しているわけである。

以上から、「かたい」のプロトタイプの意味をまとめると以下になる。

意味（1）（プロトタイプの意味）：＜ある個体が＞ ＜加えられた力に対して＞ ＜抵抗感を感じさせるさま＞

－ 初山（2016: 76）（下線、一部省略筆者）

上記（6）で観察されるように、日本語「かたい」でも、「外圧」がプロトタイプの（中心義的）意味の前提となっており、中心義においては英語“hard”と日本語「かたい」の有する各概念は類似している<sup>10</sup>。

ここまで観察した hard の「かたさ」概念の性質として「外圧を生み出す主体」、「外圧」、「（外圧に耐えうる）かたさ（抵抗力）」を分析の結果として得た。この性質を明示化するため「移動のスキーマ」（cf. Lakoff and Johnson (1999: 32-34)）における「図地分化（FIGURE / GROUND SEGREGATION）」の枠組みで以下（7）として図式化する。

（7）hard 「(受動的な) かたい」 概念図



図地分化とは、人間の基本的な認知能力である「焦点」に関する現象であり、対象において人間がより焦点を置くものを「図」（FIGURE）、焦点を置かず背景となるものが「地」（GROUND）と定義している。上記（7）の図式では、「外圧」

<sup>10</sup> 松本（2009）によると、通時的に日本語の「かたい（固い、堅い、硬い）」の原義は「心が定まっていって動揺しない」の意味であり、現在では概念的、機能的に中心義でもある「しっかりしていて壊れにくい」の意味が後に登場するため、多義構造の再編成により歴史的な原義が派生的な立場に追いやられた一例としている。

や「外圧を生み出す主体」はあくまで **hard** 「(受動的な) かたい」概念の明示的に存在しない前提にすぎないゆえに「地」であり、最も前景化している(焦点が当たっている)「対象物のかたさ」が「図」となる。

そして、(7)の図で示した概念の前提関係を具体化するため、コンテキストで明文化した一例が以下(8)の例文となる。

(8) Squirrels won't eat it, and grackles do not prefer it; some say *grackles cannot crack the hard safflower shell*.

— *The Dallas Morning News* (アクセス: 2020年2月8日)

(斜体筆者)

鳥の一種である「grackle (オナガムドリモドキ)」は safflower (紅花) の殻が固いために、砕くことができないという文脈において、**hard** によって修飾された shell が grackle (外圧を生み出す主体) の「攻撃(外圧)に屈しないかたさ」を有することが分かる。

### 3. 2. 「激しい」に関わる焦点移動

本節では、3. 1 - (7)の図地分化図をもとに、「焦点移動」の観点から **hard** の派生義「激しい」に関わる意味論分析を行う。初めに、「激しい」の意味用法で用いられている **hard** の例を以下で観察する。

(1) People tend to hit keyboards too *hard*.

(多くの人はキーボードを強く(激しく)叩きすぎる)

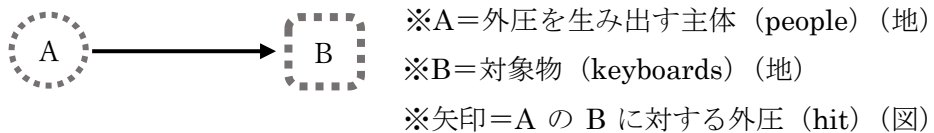
— 瀬戸 他(編)(2007) (s.v. *hard*, *adj. adv.* 5-a)

(斜体、下線、日本語訳筆者)

(1)の **hard** によって生じる意味役割が、対象である **keyboards** に対する指の当たりを強めている。つまり、3. 1. で分析した **hard** 「かたさ」の性質: 「外圧を生み出す主体」、「外圧」、「(外圧に耐えうる) かたさ」のうち、「外圧」に焦点を置いた派生義であることがわかる。**hard** の派生義概念(行為が)「激しい」

を図地分化で表すと以下（2）になる。

（2）hard の派生義概念：「（行為が）激しい」



3. 1－（7）の hard 「（受動的な）かたい」概念図と比較して、焦点が B から矢印に移動したことにより「外圧」が焦点化した結果事象として「激しい」という意味派生が生じたと考えられる。換言すると、焦点移動により、hard が有する（前提を含む）各概念間において、「（外圧に耐えうる）対象物のかたさ」から、前提であった行為の強さを担う「外圧」へと意味がスライドしたのである。

以上の論考を踏まえると、前述の 2. 2－（8）も理解に難くない。blow や slam が hard と共起することで各動作の圧力を強め、「当たりの強さ」が強化されていることが観察される。ここで注意が必要なのは hard の有する「激しい」の概念上、外圧が当たる対象が明示化されている（1）のような例をプロトタイプとする一方で、対象物は言語として必ずしも明示化する必要はないという点である。実際に、前述の hard slam は the door という対象が明示化されているが、キックボクシングのシャドーで throw a hard kick 「強い蹴りを放つ」など、対象が明示化されていないケースも容易に想定できる。前述の 2. 1－（4）の例も同様である（以下（3）として再掲）。

（3）Both boxers are breathing *hard*.

（両ボクサーは激しく呼吸している）

－ 瀬戸 他（編）（2007）（s.v. *hard*, *adj. adv.* 5）

（斜体、下線、日本語訳筆者）

このコンテキストにおいて外圧が当たる対象物は明示化されていない。それでも、

breath「呼吸」が *hard* によって強められている以上は「当たりの強さ」の概念をそれぞれ見出すことは可能である。「呼吸」とは「息を吸ったり吐いたりすること」(cf. 松村(監修)(2012: 1267))、つまり「吸気と呼気の繰り返し」であり、(3)の用例では平常時よりも吸気と呼気の繰り返しが頻繁で、体内の内気を強く外気に放出する(当てる)様子が *hard* の概念によって表されている。尚、このように *hard breath* が呼吸動作の「呼気」に焦点を当てた表現である一方で、*deep breath* は“an amount of air that enters the lungs at one time”(*OALD* (s.v. *breath*, v. 2))と定義されており、「吸気」に焦点を当てた表現である。*hard breath* の「激しい呼吸」という訳だけでは *deep breath* との相違は分かりづらいものの、*hard* の内包する概念を押さえておけば、相違点を認識することは容易になる。

この「対象物が明示化されていない」例をもう一つ 2. 1 – (5) から抜粋し次に再掲する。

(4) It's raining *hard* this morning, isn't it!

(今朝の雨は激しかったよね!)

— 瀬戸 他(編)(2007) (s.v. *hard*, *adj. adv.* 5-a)

(一部抜粋、日本語訳筆者)

焦点移動により「外圧」が前景化した結果、「雨の降り」が強まりつつある。コンテキストでは雨が当たる対象は明示化されていないものの、雨が勢いよく地面や屋根などなんらかの対象に「強く当たる」ことが想定される。

当然ではあるが、強く当たる対象物がコンテキストで明示化されている方が「当たりの強さ」の概念をより明確に認識することができる。

(5) 1. to treat or criticize somebody in a very severe or strict way

• Don't be too *hard on* him – he's very young.

(彼に強く当たりすぎないで。まだ若いのだから)

2. to be likely to hurt or damage something

• Looking at a computer screen all day can be very *hard on* the eyes.



(コンピューターの画面を一日中見ると目にとっても負担がかかりうる)

— *OALD* (s.v. hard on) (斜体、下線、日本語訳筆者)

(6) to be very upset by something

• He *took* his wife's death very *hard*.

(彼は妻の死をとっても深刻に受け止めている(ひどく落胆している))

— *OALD* (s.v. take hard) (斜体、下線、日本語訳筆者)

(5) の 1 では、対象の *him* に対して、2 では *the eyes* に対しての「強い当たり」が *hard* の「外圧」概念によって生じている。(6) も妻の死を単に *take* 「取る」のではなく「強く」取ったことによる精神的な「当たりの強さ」が自らにダメージを与えていると解釈できる。

最後に、「当たりの強さ」の概念が、意味用法から一見捉えづらいものの、2. 1 — (5) の「激しい」の枠組みに含まれる例を 3 つ取り上げる。

(7) hard porn

films / movies pictures, books, etc. that show sexual activity in a very detailed and sometimes *violent* way

— *OALD* (s.v. hard porn, *adj.*) (斜体筆者)

(8) hard liquor

[only before noun] strongly alcoholic

• *hard* liquor

— *OALD* (s.v. hard, *adj.* 11) (斜体筆者)

(9) hard drug

a power drug, such as heroin, that some people take for pleasure and can become addicted to

— *OALD* (s.v. hard drug, *n.*)

(7) は *hard* の「当たりの強さ」の概念が *violent* に現れている<sup>11</sup>。(8) のア

<sup>11</sup> *violence* を寺澤(1997)で通時的に見るとその初出は c1300 に遡り、「暴力(行為)、乱暴」の意から始ま

ルアルコール度数が高い酒は身体への当たりが強く肉体的負担は大きい。(9)の依存性が高い薬も同様に身体への当たり(負担)が強く薬の影響が強いために「依存性が高い」という意味に派生する。

### 3. おわりに

本稿では、英語 **hard** の意味論的解釈を論題に、認知言語学の観点から **hard** における「かたい」の意から「激しい」の意への派生展開を考察した。一般的に、**hard** のような基本語彙であればあるほど数多くの意味を内包する傾向にあるため、その多くの意味を有機的に結びつけ、体系的に整理することは困難であり、再現可能性を踏まえた慎重な取り組みが必要となるであろう。

### Bibliography

- Anno, N. (2014) "A Cognitive Linguistic Approach to ESP Education: in the Case of English Business Terms," in Constantinescu, M. et. al., *Omul și Societatea*, Vol. 6, 115-122. Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.
- Beitel, D. A., R. W. Gibbs and P. Sanders (2001) "The Embodied Approach to the Polysemy of the Spatial Preposition *on*," in Cuyckens, H. and B. Zawada (eds.) *Polysemy in Cognitive Linguistics*, 241-260. JJA Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins.
- Bolinger, D. (1977) *Meaning and Form*. New York: Longman.
- Fillmore, C. J. (1968) "The Case for Case." in Bach, E. and Ro.T. Harms, (eds.) *Universals in Linguistic Theory*. 1-88. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Grice, H. (1989). *Studies in the Way of Words*. Cambridge: Harvard University Press.
- Gruber, J. S. (1976) *Lexical Structures in Syntax and Semantics*. Amsterdam: North Holl.

---

っている。その後時を経て c1340 に形容詞 **violent** の初出「(自然・力など) 猛烈な」、そして、c1380 に名詞 **violence** で同意である「(自然の力などの) 猛威」、c1430 に「(感情の) 猛烈さ、熱烈さ」という変遷で意味派生が生じたと記載されている。この意味変化は「当たりの強さ」と類似した語彙概念である「暴力(行為)、乱暴」が、「激しさ」という概念に派生するという点で **hard** と部分的に同様の変遷を辿っており、本稿で主張した意味派生において一定の再現性が担保されていると考えられる。

- Halliday, M. A. K. (1977) *The Linguistic Sciences and Language Teaching*. (Longman Linguistic Library). New York: Longman.
- Jespersen, O. (1984) *Analytic Syntax*. Chicago: University of Chicago Press.
- Lakoff, G. and M. Johnson (1980) *Metaphors We Live By*. Chicago: University of Chicago Press.
- Lakoff, G. and M. Johnson (1999) *Philosophy in the Flesh: The Embodiment Mind and its Challenge to Western Thought*. New York: Basic Books.
- Langacker, R. W. (1991) *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. New York: Mouton de Gruyter.
- Levi, J. (1986) "Applications of Linguistics to the Language of Legal Interactions." in Peter, C. and V. Raskin. (eds.) *The Real-World Linguist: Linguistic Applications in the 1980s*, 230-265. Norwood: Albex.
- Wilkins, D.A. (1972) *Linguistics in language teaching*. London, UK: Arnold.
- 阿武尚人 (2018) 「言語文化と教育 — 英語 dry の多義性を通して —」『京都産業大学論集』第 51 巻, pp. 327-347. 京都産業大学.
- 池上嘉彦 (1975) 『意味論 — 意味構造の分析と記述 —』. 大修館書店: 東京.
- 上野義和・森山智浩 (2012) 「異言語教育と言語文化 (その 4) — メタファー研究の再考と言語文化教育の展開 —」『京都外国語大学研究論叢』第 79 号, pp.1-21. 京都外国語大学国際言語平和研究所.
- 上野義和・森山智浩・入学直哉 他 (2002) 『認知意味論の諸相 — 身体性と空間の認識 —』. 松柏社: 東京.
- 上野義和・森山智浩 他 (2006) 『英語教師のための効果的語彙指導法 — 認知言語学的アプローチ —』. 英宝社: 東京.
- 高橋雄太 (2017) 「形容詞「かたい」の意味と表記 — 近代雑誌コーパスを用いて —」『国際日本学研究論集』第 6 号, pp.1-17. 明治大学大学院.
- 中桐謙一郎・森山智浩 (2003) 「「容器」メタファーと「重・‘heavy’硬・固・硬・‘hard」の概念拡張メカニズム — 認知言語学的アプローチ —」『南大阪大学紀要』第 5 巻 (通号 25 号), pp. 35-52. 太成学院大学.
- 松本曜 (2009) 「多義語における中心的意味とその典型性: 概念的中心性と機能的中心性」『Sophia Linguistica』(57 号), pp.89-99. 上智大学国際言語情報研究所.

- 宮畑一範 (2006) 「DRY の多義に関する一考察」『言語文化学研究』(言語情報編) 第 1 号, pp. 1-12. 大阪府立大学.
- 榎山洋介 (1994) 「形容詞「かたい」の多義構造」『名古屋大学 日本語・日本文化論集』2 号, pp. 65-90. 名古屋大学留学センター.
- 榎山洋介 (2016) 「形容詞「かたい」の意味ーメトニミーとフレームの観点からー」『言語文化論集』37 卷 2 号, pp. 73-87. 名古屋大学大学院国際言語文化研究科.
- 森山智浩 (2015) 「[Enter into NP] の概念研究ー認知言語学的アプローチー」『近畿大学 法学』第 62 卷第 3・4 号, pp. 187-245. 近畿大学法学会.
- 森山智浩・高橋紀穂 (2010) 「レイコフとバタイユの視座における「自殺と反道徳性」の研究ー法言語学と法社会学による学際的アプローチー」『近畿大学 法学』第 58 卷第 2・3 号 (通巻 159 号) (近畿大学法学部創立 60 周年記念号), pp.585-678. 近畿大学法学会.
- 森山智浩・入学直哉 他 (2010) 『英語前置詞の概念ー認知言語学・教育学・社会学・心理学・言語文化学の学際的観点からー』(FD 語学教育改革シリーズ 1). ブイツーソリューション: 愛知.

#### 【Dictionaries】

- [*LDCE*] Quirk, R. (ed.) (1987) *Longman Dictionary of Contemporary English*. London: Longman.
- [*OALD*] Hornby, A. S. (ed.) (1995) *Oxford Advanced Learner's Dictionary*. London: Oxford University Press.
- [*OED*] Burchfield, R.W. (ed.) (1978) *The Oxford English Dictionary*. Oxford: Clarendon Press.
- 井上永幸・赤野一郎 (編) (2006) 『ウィズダム英和辞典』. 三省堂: 東京.
- 瀬戸賢一 他 (編) (2007) 『英語多義ネットワーク辞典』. 小学館: 東京.
- 瀬戸賢一・投野由紀夫 (編) (2012) 『プログレッシブ英和中辞典』. 小学館: 東京.
- 辻幸夫 (編) (2013) 『認知言語学キーワード辞典』. 研究社: 東京.
- 寺澤芳雄 (編) (1999) 『英語語源辞典』. 研究社: 東京.
- 政村秀實 (2002) 『英語語義イメージ辞典』. 大修館書店: 東京.
- 松村明 (監修) (2012) 『大辞泉 【第二版】』. 小学館: 東京.

【Websites】

*Corpus of Contemporary American English*

URL: <http://www.english-corpora.org/coca/>

*The Dallas Morning News – Finding the perfect recipe to welcome little birds, repel grackles in Dallas.*

URL: <https://www.dallasnews.com/arts-entertainment/2013/01/03/finding-the-perfect-recipe-to-welcome-little-birds-repel-grackles-in-dallas/>

*Mike Tyson – The Hardest Puncher in Boxing Ever!*

URL: [http://www.youtube.com/watch?v=\\_BLLaKcMrm0](http://www.youtube.com/watch?v=_BLLaKcMrm0)